

2023年1月8日 新年礼拝

メッセージ「ただちにエジプトへ」

水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 2章 13-15節

ご存知のように、神の独り子であるキリストの、人間として・幼子イエスとしてのこの世への降誕という出来事は、この世的には非常にひそやかになされたことを思います。そのことをまず、3つの点を通しておさらいしたいと思います。

まず1つ目は、神様は若くて貧しいヨセフとマリアの夫婦、故郷の街にもかかわらずどこにも泊めてもらうことのできなかつたような夫婦のもとに、キリストをお送りになったということ。まさか世界の救い主・いにしへの預言に言い伝えられていた待望のメシアがそんな貧しい夫婦の下に生まれるなんて、世界中の誰も、当の本人たちでさえも予想だにしていなかったことでしょう。

そして2つ目は、幼子イエスは飼い葉桶に寝かされていたということ。すなわちユダヤ人の王たるキリストは、王たるにふさわしい宮殿どころか、人並みの家屋でさえもない、暗くて不潔な家畜小屋で産み落とされたわけです。ダビデの子が飼い葉桶に寝かされているなどは、これもまた誰にも考えられなかったことでしょう。

そして3つ目。洗礼者ヨハネ、イエスの親戚にあたる人物であり、主に先立って行き、その道を整え、主の民に罪の赦しによる救いを知らせる者として生まれた洗礼者ヨハネ、その彼が近所の人々や親類など多くの人々に喜ばれて誕生したのとは対照的に、幼子イエスは誰にも気付かれることなくひっそりとお生まれになったということ。お祝いに訪れた者といえは、天使に導かれてやってきた羊飼いたちと、星に導かれてはるばる東方の国からやってきた占星術の学者たちだけだったわけです。このようにイエス・キリストの誕生は世界の救い主の誕生にしてはあまりに質素で寂しいものでした。私たちから見ると。

しかし、キリストのひそやかな誕生にまつわるこれら3つの事実からは、キリストが何のためにこの世にお生まれになったかということの意味を、私たちは読み取ることができるわけです。例えばそれは、キリストが弱い者とか貧しい者、力ない者、虐げられている者を慰め、勇気付け、喜びに満たして立ち上がらせるためだったということです。そのためにイエスは、富も権力もある夫婦のもとに、多くの召使にかしづかれながらではなく、富も力もない、何の誇れるところも褒められるところもない

ような貧しい夫婦のもとに、馬小屋でひっそりと生まれたのです。そしてそのことは、イエスを訪問した羊飼いたちや東方の占星術の学者たちに代表されるような、底辺を這いずり回りながら懸命に生きている者たちや、いわれのない侮辱に耐えながら生きている者たちにとって、神はあなた方と共にいつもあるという明確な喜ばしいメッセージであったに違いない。かれら羊飼いや外国の学者たちの訪問は、どんな権力者や金持ちの訪問にもまさるような、いたわりと友愛に満ちた、まごころにあふれた心温かいものだったんじゃないでしょうか。

そしてその神によって呼び集められた訪問者たちが心満たされて帰って行ったあと、イエスの生まれた家畜小屋の中は再びひっそりとした、しかし温かい静寂に包まれたことでしょうけれども、しかし翌日からはまた、私たちが知るものと同じ日常が何事もなかったかのように始まるわけです。まるでクリスマス礼拝を終えて心満たされて家路についた私たちが、次の日からまた何事もなかったかのように慌ただしい日常を始めるようなものです。そしてその時には既に、世界は救い主イエスをめぐって動き始めておりました。マリアとイエスと共に体を横たえて寝息を立てて眠るヨセフの枕元に、ある日再び天使が立って言うのです。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている」(2:13)。ヨセフはその言葉にはっとして目覚めると、マリアを起こしてイエスを抱き上げ、夜のうちにベツレヘムを脱出し、エジプトへと旅立ちます。間一髪、だったのかどうかは分かりませんが、後に天使のみ告げのとおり、自分の権力が脅かされることを恐れたヘロデ大王がベツレヘム周辺にいた2歳以下の男の子をかたっぱしから皆殺しにするという恐るべき出来事が起こったのでした。この大虐殺が歴史的に本当にあったかどうかは断定できないものの、この当時、最晩年のヘロデ大王は猜疑心が絶頂に達していた時でもあり、自分の立場を脅かす者は家来であろうと身内であろうと片っ端から抹殺していた頃でした。実際にヘロデは自分が死ぬ数日前にも、自分の息子を処刑していたわけです。それほどまでに臆病で残忍なヘロデでしたから、自分の保身のためにこのような大規模な虐殺を実際に行ったとしても何の不思議もないといわれています。いずれにせよヨセフが夜のうちにベツレヘムを脱出し、ヘロデの手の届かないエジプトへと避難したことは正解だったと言えるでしょう。

このことは、私たちにいくつかのことを問いかけています。私たちはこのヨセフの

ように、示されたメッセージに対してフットワーク軽く、身軽に対応できるのか。現代の私たちの世界、特に私たちの日本では、命の差し迫った危機こそ、まだ今のところ外国のようにそれほどないわけですが、しかし一方で、私たちの魂を滅ぼそうとする様々な誘惑や試練というものは私たちの周りに満ち満ちていることを思います。私たちはその魂の危機とでもいうべき事態を告げ知らせる御告げを敏感に察知する耳を持っているか。私たちは自分の身体の危機、例えばがんが発見されたとか、そんな時にはきっと慌てて病院に駆け込み必死になって逃れの道を模索するに違いないのに、魂の危機に関してはなぜ悠長に構えていられるのか。私たちを滅ぼそうとするヘロデは何も政治的な権力者の姿をしているとは限らない。現代のヘロデは、私たちの魂を滅ぼそうとあらゆる誘惑や災いの形をとって私たちの魂に手を伸ばそうとしています。私たちは、その危機を告げ知らせる御告げに耳を傾けて、ヨセフのように飛び起きて夜のうちにエジプトへ逃げなければいけない。では私たちにとってのエジプトとはどこか。それはやはり教会なのではないか。自分にとっての逃れの地、エジプトは教会であった、教会にのがれることで癒され、慰められ、励まされ、力を与えられて魂の危機を救われたという方も実際にたくさんおられることと思います。そして教会がやっぱりそういう場となっていかなければならないことを思います。神様は、私たちがこの世のあらゆる悪から遠ざかるための現代のエジプトたる教会へと、逃れの道を備えていて下さっています。私たちはこの道を何度でもたどって、この祈りの家で魂を憩わせ、永遠の滅びから免れる者とされたいと思います。

このように、私たちのこの教会は、私たち自身にとっての逃れのエジプトであり、またそうであるべきなのですが、同様に私たちの教会は、私たちだけのものでなく、少しでも多くのこの世の人々の魂が滅ぼされないための、逃れのエジプト・救いの箱舟にもなってゆかねばならないことを、同時に思います。そのために私たちは、私たちの愛すべき隣人の魂が危機に面しているとき、「すぐにエジプトへ逃げなさい」「すぐに教会へ行きなさい」と天使の代わりに告げることができる者とならねばならない。そしてそうやって隣人の魂を危機から遠ざけて救いへと導くために、まず私たちが謙虚に聖書の御言葉に耳を傾け、キリストの宣べ伝えられた福音、またそこに流れている神様からのメッセージを改めて学んでゆくことから、この新しい年、心新たにはじめたいと思います。